

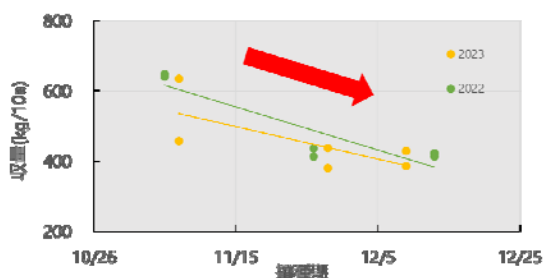
小麦「さとのそら」の収量低下改善に向けた栽培技術等を検討しました(続報)

気候変動の影響は近年の麦作においても発生しており、特に、平成30年産の「さとのそら」では播種遅延から、年内の生育量不足から極めて少収となりました。

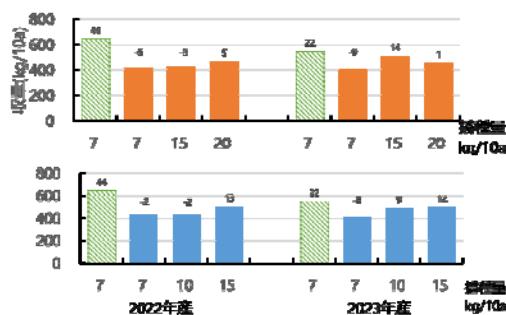
また、一部現地では穂肥施用時期に散布できないことから、省力的な一発肥料を使用していますが、肥効が十分ではなく、少収あるいは低タンパクとなっています。

そこで小麦の収量低下を改善すべく、1.播種遅延に対する技術、2.基肥一発肥料の構成を検討しました。

1.播種遅延に対する播種量の検証

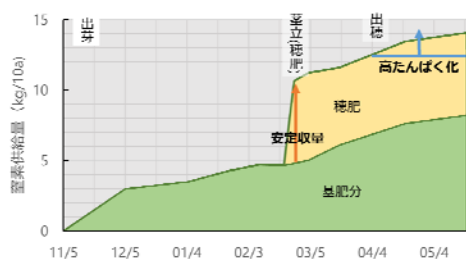


暖冬年では播種が遅れても収量が確保されてしまったが（2021年産）、通常の冬季条件となった2年間では、播種が遅れると低収となることが確認された。

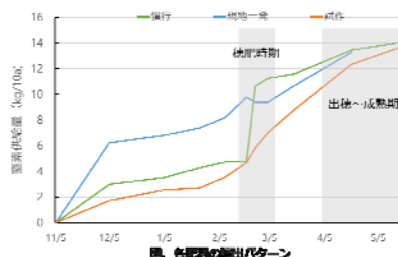


11月下旬では播種量を10kg/10a以上に12月上旬では播種量を15kg/10a以上に増量することで、適期播までは無理ではあるが、通常播種量では減収する状況が回復させられることが確認された。

2.「イワイノダイチ」の基肥一発肥料の検討



現状の追肥体系（緑と黄の積上げ）では、穂肥（黄色）で収量が、基肥の終盤溶出（緑色）でタンパク含量が確保できる。



試験肥料（オレンジ線）では初期溶出を抑制したが、穂肥のような溶出にはならず、収量が不十分であった。

(研究成果)

- ・小麦奨励品種「さとのそら」の播種遅延に対し、播種量の増量が有効である。ただし、平年並までの回復までは困難である。
- ・気候に適合できず収量や品質が安定しない現行の基肥一発肥料に対し、初期溶出を抑制し穂肥時にも溶出が期待できる改良型が有効であった。ただし、穂肥としての溶出量が少なく収量が不十分な場合もあり、今後も継続的に検証していく。